

〔宗長手記〕敵川のむかひにうちいで射矢雨のごとし、數萬の軍兵やすくとうちわたす敵はすなはち引入ぬ、敵の城六ツ、七ツめぐり五十餘町の内おひこめ、六月より八月まで攻らる、城中をこばくの軍兵數日をへて、八月〇永正十九日に落居安部山の金堀をして、城中の筒井ことぐくはりくづし、水一滴もなかりしなり、

〔和漢三才圖會水十七〕井○中略

按有掘拔井隨土地淺深不定、五丈七丈而至如鑄鐵者俗云以鐵梃急突破鑿穴而逃上、如緩則所湧水勢損人其水雖極旱不涸、而常溢於榦不能渫盡也。

〔塵塚談下〕掘貫井戸の事、先年よりこれ有しが、武家には更になし、金子貳百兩ほどもかかる事故、大商ならでは掘ざりしにより、彼所に一つ、爰に一つ有て、やうやく尋るほどに有りしが、二三十年以前、大坂より井夫キドカリ來り、あをりとかいふ奇器を以て、無造作に掘る事を覺へしより、價も至て下直なり、我等しれる極樂水とうふや井戸かわ共、三兩貳分にて出來しよし、其向にみつまたといふ湯屋は、最早く掘抜せしによりて、貳拾兩程かゝりしよし、夫故にや近邊第一の井戸となれり、近頃は江戸中掘抜井多くなり、一町の内に三四ヶ所もこれあり、室鳩巣翁江戸に水道の諸所へかゝりければ、已後火災多からんと患ふ、掘抜井の多くなりしも、水道に同じかるべきにや、

〔守貞漫稿家宅井〕

又阪太堀拔ト號シテ、別制井アリ、普通ノ井ハ地水ナルノミ○中略堀ヌキハ、坤軸ヲ貫キ清水ヲ呼ブ者ヲ云、汲ズシテ常ニ涌出ス、此井唯二井アリシニ、高津西坂筋楊屋町ニ在シ一所ハ、文政ニ亡ビ、今ハ長堀東涯ノ豪民住友氏ノ前河岸一所ノミ存セリ、此水ハ食料ニ足リ、河水渴テ飲料ニ困ム時、衆人爭テ汲之○中略

又江戸モ堀拔井アリ、是ハ玉川及井ノ頭ノ水ニ非ズ、地軸ヲ貫キテ清水ヲ涌出セシムルモノ也、